百姓マレイ

フョードル・ドストエフスキー

神西清訳

青空文庫

そのとき、わたしは、まだやっと九つでした……いやそれよりも、わたしが二十九の年のことから話を始めたほうがいいかもしれません。

それは、キリスト復活祭の二日めのことです。もう陽気も暖かで、空はまっさおに晴れわたり、太陽は高いところから、ぽかぽかと暖かな光りをきらめかせていましたが、わたしの心は、まっ暗でした。わたしは牢屋のうらをぶらぶら歩きながら、がっしりした監獄の杭を一本一本かんじょうしながらながめていました。この杭をかぞえるのは、まえからわたしのくせでしたが、そのときは、どうもあまり気がすすみませんでした。監獄の中でも、復活祭はきょうでもう二日めで、お祭りのおかげで、囚人たちは、まい日させられるしごとにも出て行かず、朝からお酒を飲んでよっぱらったり、あっちこっちのすみでは、ひっきりなしに、言いあいやけんかが始まっていたのです。なんだか、があがあいやな歌をわめきたてたり、こっそり寝床の板の下にかくしてカルタをしたり、何かとんでもないらんぼうなことをして、なかまの囚人たちにふくろだたきのめにあわされ、あげくのはて、すっかりまいってしまい、頭からすっぽり毛皮のきものをかぶせられたまんま、板の寝床にのびている囚人がもう二三人もいるのです。こんなことが、このお祭りの二日のあいだに、わたしをすっかりまいらせてしまったのです。いったいわたしは、まえから、人がよっぱらって大さわぎをするたびに、いつもいやでいやでたまらなかったのですが、牢屋の中では、なおさらやりきれないのでした。お祭りだというの

で、いつものように役人は牢屋の中を見まわりにもこないし、部屋の検査もされず、酒を持ちこむのも、おおめに見られていたのです。

とうとう、わたしは、むらむらと腹がたってきました。ところが、そのときふと、ポーランド人の囚人に出あったのです。その男は、暗い顔つきでわたしを見ましたが、その目はぎらりと光り、くちびるはぶるぶるふるえだしました。

「ちぇっ、あのごろつきどもめ！」と、くいしばった歯のあいだからはきだすように小声でそうつぶやくと、そのままわたしのそばを通りすぎて行きました。

わたしは、牢屋の中へひきかえしました。じつは、つい十五分ほどまえには、どうにもがまんがならなくて、顔色を変えて外へとびだしたばかりなのですが、――というのは、ちょうどそのとき、強そうな百姓が六人がかりで、よっぱらったダッタン人のガージンをやっつけようと、いっせいにとびかかってなぐり始めたからです。そのひどいなぐりようときたら、お話にも何もなりません。あんなめにあわせたら、らくだだって死んでしまう。だが、あいてのダッタン人はおそろしく力の強い男で、めったにへたばるようなやつじゃない。だからなぐるほうも、安心して気がすむまでなぐりつづけたというわけなのです。――今わたしが部屋にもどってみると、そのさわぎもすっかりおさまって、すみっこの寝床の上に死んだようになって、気の遠くなったダッタン人が寝かされていました。みんなはそのそばをだまったままよけて通るのでした。だれでも心の中では、なあに、あすの朝になったら気がつくだろうさ、と思いこ

んではいるのですが、「だが、なんともわからないぞ、あんなにやっつけられたんじゃ、ひょっとしたら死ぬかもしれねえぜ。」とでも言いたそうな顔つきでした。

わたしは、人をかきわけて、鉄格子のはまった窓に向かった自分の場所へたどりつくと、両手を頭の下へあてがってあおむけにごろりと寝て、目をつぶりました。わたしはこうして寝ころんでいるのが好きでした。だって、寝ている人にかまう者はないし、そのあいだに、いろいろなことを頭に浮かべて楽しんだり、考えごともできるからです。けれどわたしは、今はそれどころではありませんでした。胸はどきどきして、耳には、「ちぇっ、あのごろつきどもめ！」という、ポーランド人のさっきのことばがひびくのでした。

そのうちに、だんだん心がしずまってきて、いつのまにか、ずっとむかしの思い出にひたり始めました。

どうしたはずみか、その日、ふと心に浮かびあがったのは、まだやっと九つのころの、わたしの少年時代のことです。それも、わたしがもうすっかり忘れてしまっているはずの、ほんのひとときのことでした。

わたしの家の領地だった村で暮らしたある年の八月のことです。それは、さわやかに晴れわたった日でしたが、風があって、すこし寒いくらいでした。夏ももうおわりに近く、わたしはまもなくあのモスクワの町へ帰って、また、ひと冬じゅうフランス語を勉強しなければなら

ないのです。それを考えると、この村を去るのが残念でたまりませんでした。わたしは打穀場のうらてをぬけて谷へくだり、荒れ地のほうへのぼって行きました。谷の向こうがわから森のところまでずっとつづいている、こんもりしたたけの短い林を、村の人たちは荒れ地と呼んでいたのです。やがて、わたしがその林のしげみをわけてずんずん奥へはいって行くと、そこからほど近い林のあいだのあき地で、百姓がたったひとりで畑を起している音が聞えてきました。わたしは、その百姓のたがやしているのが急な山畑で、馬が鋤をひいて歩くのにはつらい場所だということを知っていました。じっさいわたしの耳には、ときどき、「ほれ、よう！」という百姓のかけ声がつたわってくるのでした。

わたしは、村の百姓は、ほとんどみんな知っていましたが、今たがやしているのが、その中のだれなのかわかりませんでした。それに、そんなことはどうだってよかったのです。というのは、わたしは自分のしごとに夢中になっていましたから。つまりわたしは、かえるを打つために使うくるみの枝をおろうと、一生けんめいでした。くるみの枝でつくったむちときたら、きれいで、よくたわんで、とても白かばの枝なんか、くらべものにならないのです。それだけじゃありません、いろんなかぶと虫にもわたしは気をとられていました。わたしは採集にかかりましたが、なかなかきれいなのがいました。わたしはまた、小さくてすばしっこい、黒いぶちのある赤黄いろいとかげまで好きでしたが、へびは気味がわるかった。もっともへびは、とかげのようにちょいちょい出っくわしはしませんでした。きのこは、そのへんにはめったに

ないので、きのことりには、白かばの森へ行かなければなりません。そこでわたしは、出かけようとしました。わたしは一生のうちで、あの森くらい好きだった場所はありません。きのこがある、野いちごがある、かぶと虫もいれば、小鳥もいる。針ねずみ、りす、それから、わたしの好きで好きでたまらなかったあのしめっぽい落葉のにおい。……わたしは今これを書きながら、白かばの林のにおいをしみじみかぐような気持がします。そういう感じは、一生のあいだ、いつまでも消えずに残っているものです。

　するとふいに、あたりの深い静けさのうちに、わたしははっきりと、「おおかみがきたよう！」という悲鳴を聞きました。わたしは、きゃっと叫ぶと、こわさのあまり夢中になって、ありったけの声でわめきたてながら、あき地で畑をたがやしていた百姓のほうへ、いっさんにかけだしました。

　それは、わたしのうちの百姓のマレイだったのです。そんな名があるかどうか知りませんが、とにかくみんなが、かれのことをマレイと呼んでいました。年は五十くらいでしょうか。がっしりした、かなり背の高い、ひどく白髪のまじった赤ちゃけたひげをぐるりと顔いちめんにはやした百姓です。わたしは、それまでマレイを知ってはいましたが、一度も口をきいたことはありませんでした。わたしの叫び声を聞きつけると、百姓はわざわざ馬をとめました。そこへとびこんで行ったわたしが、片手でマレイの鋤に、もう一方の手でその袖にしっかりしがみついたとき、マレイは、やっと、わたしのただごとでないようすを見てとりました。

「おおかみがきた！」と、わたしは息をきらしながら叫びました。

百姓は、ひょいと首を起して、思わず、あたりを見まわしました。ほんのちょっとのあいだ、わたしの言うことにつられたのです。

「どこにおかかみがね？」

「そうどなったんだよ……。だれだか今、《おおかみがきた》ってどなったんだよ……」と、わたしはよくもまわらない舌で、やっと言いました。

「やれやれ、何かと思ったら。なんのおおかみがいるもんかね、そりゃ、そら耳というものさね、そうとも！　なんの、このへんにおおかみがいますもんかね！」と、マレイはわたしをはげますように、つぶやきました。

でもわたしは、からだじゅうぶるぶるふるえながら、ますますしっかりと、マレイにしがみつきます。きっと、まっさおな顔をしていたのにちがいありません。マレイは不安そうな笑いを浮かべてわたしの顔を見ていました。今にも、わたしがどうかなってしまいはしないかと、それが心配でたまらないらしいのです。

「ほんに、さぞたまげたこったろうになあ、やれやれ！」と、首をふりました。「もういいさ、なあ坊。坊は強いぞ、なあ！」

百姓は片手をのばすと、ふいにわたしのほおをなでました。

「さ、もういい、もういい。キリストさまがついてござるだよ、十字をきりなされ。」

けれどわたしは、十字をきりませんでした。わたしのくちびるの両はしは、ひくひくとひっつれ、それがことにマレイの心をうったようです。百姓は、そっと黒い爪をした泥まみれの太い指をのばして、まだひくひくひっつれているわたしのくちびるに軽くさわりました。

「ほんにほんに、なあ。」と、マレイは、なんだか母親のような、ゆっくりと長いほほえみを浮かべて、わたしに笑いかけました、「かわいそうに、なんとしたことじゃやら、ほんになあ、やれやれ！」

わたしは、やっとのことで、おおかみなんていなかったんだ、あの「おおかみがきた」という叫び声は、わたしのそら耳だったのだ、とわかりました。でも、あの悲鳴は、はっきりありありとわたしには聞えたのですが。——そういうことは、まえにも一二度はあったのでした。

「じゃ、ぼく行くね。」と、わたしはまるで相談するように、おずおずとマレイを見あげながら言いました。

「さあさあ、行きなされ、わしがこうして、うしろから見てたげましょうわい。このわしが、なんの坊をおおかみにやるものかね！」と、百姓は、あいかわらず母親のようなやさしいほほえみで笑いかけながら、そうつけたしました。「な、キリストさまが、ついておいでじゃ、さあ、行きなされや。」

そして、片手でわたしのかわりに十字をきり、それから、自分も十字をきりました。

わたしは、十歩ごとにうしろをふりかえりながら歩いて行きました。マレイはわたしが歩い

て行くあいだ、ずっと自分の馬といっしょに立ったまんま、わたしのうしろを見送っていてくれました。わたしがふりかえるたびに、うなずいてみせるのでした。じつは、わたしは、あんなにふるえあがったのが、今ではなんだかマレイにすこし恥ずかしくなりました。けれど、それでも、谷の斜面をのぼって、とっつきの納屋へ出るまでは、やっぱり、おおかみをこわいこわいと思いながら歩いて行ったのです。でも、そこまできたら、こわいなぞという気持は、すっかり消しとんでしまいました。すると、そのときふいに、どこからやってきたのか、うちの飼い犬のヴォルチョークが、わたしにとびつきました。犬がきたので、わたしはもうすっかり元気になって、おしまいにもう一ぺん、マレイをふりかえってみました。その顔は、もうはっきりとは見えませんでしたが、やっぱりやさしくほほえみながら、こちらへ向かってうなずいているような気がします。わたしが手をふると、マレイのほうでも手をふって、それから馬を引き始めました。

「ほれ、よう！」また、マレイのかけ声が遠くつたわってきて、馬は鋤を引き始めました。

こんなことが、みんな、どうしたわけか一度にぱっとわたしの心によみがえってきました。おどろいたことには、こまかいことまで、とてもはっきりと、浮かんできたのです。わたしは、急にはっとして、板の寝床の上に起きなおりました。そのわたしの顔には、今でもおぼえているのですが、まだ静かな思い出のあのほほえみが消えずに残っていました。ほんの一分ばかり、

わたしは、まだ思い出にひたっていたのでした。

わたしはその日、マレイの畑からうちにもどっても、あの「できごと」のことは、だれにも話しませんでした。それに、できごとというほどのことでもないではありませんか？　マレイのことだって、そのころはじきに忘れてしまったのです。その後、たまにマレイに出あっても、おおかみのことだけでなく、なんの話だって、一度もしたことはありません。それがどうでしょう、二十年もたったきょう、このシベリアの監獄の中で、ふいにあのときマレイに出あったことが、これほど目に見えるように、こまかいすみずみまで、はっきりと思いだされたのです。つまり、あのマレイとの出あいは、わたしの魂の奥に、わたしがちっとも気がつかないのに、ひとりでにいつのまにかはいりこんでいて、ちょうど必要なときになって、ふいに浮かび出たわけです。あの貧乏な百姓の、やさしい、まるで母親のようなほほえみだの、お祈りの十字のしるしや、あの首を横にふりながら、「ほんに、さぞたまげたこったろうになあ、なあ坊」と言ってくれた声などが、わたしの頭に浮かんだのです。とりわけはっきり思いだすのは、わたしのひくひくひっつれるくちびるに、おずおずと、やさしさをこめて、そっとさわった、あの土だらけの太い指だったのです。

青空文庫情報

底本：「世界少年少女文学全集　19　ロシア編2」東京創元社
　　1954（昭和29）年9月25日初版発行
　　1958（昭和33）年10月20日7刷
※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「≪」（非常に小さい、2-67）と「≫」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。
入力：高柳典子
校正：土屋隆
2009年3月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

百姓マレイ

フョードル・ドストエフスキー

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　神西清訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/